

研修医・指導医リレーエッセー⑪



臨床研修医制度を経験せずに指導医になった指導医のなやみ

水島中央病院 副院長・臨床研修指導医 緒方 正敏

2004年から導入された新医師臨床研修医制度は、それ以前に医師となった私にとっては大きな変化となりました。これまでは指導医とし後進を指導するとき専門医として知識を優先し、臨床の場で学ぶ疾患も偏った傾向がちとなっていました。この制度によって我々は指導医として医療技術を伝えるだけではなく、基本的な診療能力やプライマリケア能力、幅広い疾患、ガイドラインに基づいた診断、治療のアップデートなど幅広い知識とそれらを伝える指導力も求められるようになりました。指導医講習会などを受講しましたが、それだけでは十分ではなく、自分で手探りをしながらの学習となりました。病院全体では初期研修の2年という限られた期間の中で医師として安全な医療提供を行う重要性を、また指導医は研修医とともに、診断、治療の実際で示していくことの難しさを日々実感しています。救急医療や地域医療での様々な問題を含む幅広い症例を、症例検討会や日々のカンファレンスを通して研修医とともに、エビデンスと実際の症例を結びつけるよう指導することに努めてきました。

また、当院の持つ地域の中核病院として地域医療を支えていく病院においては、患者中心の安全な医療の提供は重要な点となっています。当院では指導医とともにコメディカルも研修において重要な役割を担っており、チーム医療を実践しつつ研修医の診療行為を見守りながら、その成長にあわせて必要に応じて介入、治療手技も研修医の成長を促すよう診療科の垣根を越えて指導に当たるように工夫しています。初期研修期間を通じて、専門医として自分の進む道が開けてくるような研修が行えるように、各指導医、コメディカル、そして研修医と相談しながら進めることに取り組んでいます。研修医が成長できる環境を作ることは、指導医や研修病院としての役割の一つと考えています。現在の指導は決して十分なものではないと感じており、良い指導ができていたかどうかは、当院の研修医が同じ指導医の立場となったときに、彼らがどう感じたかでわかるものと思います。

まだまだ医療はプライマリケアや地域医療を重視しつつ様々に広がりを見せていくと思っております。診療技術においてAIの活用や画像診断の進歩など、研修医も指導医も新しい技術を早期から学び生かせるようにしていかねばならない状況にあります。初期研修ではその基礎にある医師としての患者に寄り添った姿勢や総合的な医療ができる医師をめざし、上級医、指導医の経験を受け継いでもらえればと考えております。



研修医に寄り添った指導（左端が筆者）